

クラスメイトはアイドル

ウナム・宏

プロローグ

ステージの方から大歓声とMIHIROコールが響き渡る。

ここは札幌ドームで行われているアイドル歌手MIHIROのコンサート会場、そして、俺、内藤大地は、夏休みのバイトで札幌ドームに来ている。

何故こんな事に成ったかという、話せば長い経緯がある。

「MIHIROちゃんのスタンバイ完了」

そう声がかかる。

「カウントダウン開始！」

あちらこちらで、走り回るコンサートスタッフの邪魔に成らないよう、端の方でその動きを眺めている。

「内藤君、始まるわよ、シャキッとしなさい！」

「は、はい、あさみさん」

彼女は、日吉あさみ年齢は非公開、アイドル歌手MIHIROをスカウトして、トップアイドルに育てた敏腕マネージャだが、今は、松葉杖を着くその姿にその片鱗も感じない。

「ミュージックスタート！」

舞台監督の合図で音楽が鳴り始めると、ドーム内にスモークが立ち込め、レーザー光線が飛びかう。

そして、舞台下からMIHIROが昇降機でせり上がってくると、MIHIROコールは更に大きくなり、そして音楽と共に彼女が歌いだす。

その姿を舞台袖から、あさみさんと二人眺めていた。

一曲目が終わると、彼女は観客に手を振りながら話し始めた。

「最前列が騒がしいわね」

日吉さんの視線を追うと、観客が警備員ともめている。

MIHIROのファンは比較的マナーが良く、この手のトラブルは滅多にないのだが、今回はその滅多に当たったようだ。

警備員二人が興奮した観客の両腕を抱え、警備員室へ連れて行こうとする姿が見えた。

それを見てやれやれとMIHIROに視線を移した瞬間、横であさみさんが「あ！」と声を上げ、それに釣られ視線を戻すと先程の観客が警備を振り切ってステージに上っていた。

それを追いかける様に、警備員も舞台に上がろうとするが間に合わない。

「内藤君！」と声をかけられるより早く俺はステージに飛び出した。

自慢じゃないが、運動神経は消して良くないが、それでもステージ上った暴漢に向かっ一気に走り寄り体当たりをした。

そのまま勢い余って暴漢と共に、ステージからステージ下に転げ落ちる。そこで俺の意識は無くなった。

遠くの方で俺を呼ぶ声が聞こえた。

雨の日の彼女

教室の窓から雨が降る外を眺めていた。

「大地！」

突然の呼びかけに呼ばれた方を見ると、友人の本多が立っていた。

「どうした、そんな大声で？」

「大声って、ぼけっとして何度読んでも返事しないからだろ」

どうやら外を眺める内にHRは終わって、それにも気づかずぼけっとして気が付かなかったようだ。

「HR終わったぞ、野球部も中止だから、偶には一緒に帰ろうぜ」

それに返事をする、鞆を持って二人で廊下へ出た。

廊下で中学からの付き合いの純と軽く挨拶してすれ違った。

「なあ大地、最近、純が美人になったと思わないか？」

「そうか、あんまり感じないけどな」

俺の無い気のない返事に、更に続ける。

「そっか、大人っぽくなったと言うか、こう胸が大きくなって、雰囲気もって、おい！」

そんな本多の主張を適当にあしらいながら校門を出た。20分も歩くと本多と別れ、一人家に向かって歩き始めた。

しばらく歩くと目の前の道端に赤い傘が蹲っていた。

気に成りながら少しずつ近づいて行くと、傘がその場に置かれ一人の少女が鞆で頭を庇いながら走り出した。それは、同じクラスの窪だった。

俺が声をかける間もなく走り去る彼女、その彼女が置いて行った赤い傘の所まで来ると傘の下には、段ボールに入れられた子犬が捨てられていた。

その子犬たちが雨に濡れないように、赤い傘がかぶせてあったのだ。

俺は鞆の中に残っていた、お菓子を出すと子犬に与えた。

最初は警戒していたが、しばらくすると子犬はお菓子を食べ始めた。

その頭を軽く撫でると子犬を抱き上げた。

「よし、家へ来るか！」

俺は制服の内側に入れると、赤い傘をたたみ家に向かって歩き出した。

家に帰るとお袋に散々文句を言われたが、去年長く可愛がっていた愛犬が亡くなってから寂しかったらしく、結果的には俺以上に喜んでいた。

仕事から帰った親父も、お袋の説得で首を縦に振るしかなかった。

翌日は雨も上がり、普段通り登校した。

「おはよう」

後から聞きなれた声が聞こえた。

「おはよう、純」

中学からの付き合いだが、あまり異性として意識をした事は無かったのだが・・・

「本多め、余計な事を」

適当にあしらってはいたが、昨日の本多の発言でいつも以上に意識してしまった。

「どうかした？」

俺の独り言に反応した純に、「なんでもね一よ」と答えながら教室に向かう。

席に着くと、鞆の中の赤い折り畳み傘を確認して、持ち主が登校してくるのを待った。

やがて教室に入ってきた窪さんに「おはよう」と声をかける。

普段あまり話さない俺の行動に、一瞬戸惑ったような表情を見せたが、「おはよう」と返事が返ってくる。

窪さんは席に着くと、鞆から教科書を引き出しに移し始めるが、その横に立ったままの俺に気が付いた。

「どうかした？」

更に怪訝そうな顔を見せた。

「あの、」

鞆から傘を取り出そうとした時、別の方向から声を掛けられた。

「おっす、大地！」

部活の朝練を終えて教室に入ってきた本多だった。

「大地、昨日のM10見たか？、MIHIROちゃんの新曲最高だぜ！」

こちらの都合などお構いなしに話しかける。

「おはよう窪さん、健一もおはよう」

更にそこへ純まで混ざって来たので、結局、傘を返すタイミングを逃してしまった。

それ以来、傘を返すタイミングを逃してしまい悶々としたままの日々を過ごしていた。

三日目の放課後、また雨が降っている。自分の傘を持って、学校を出ようとする時昇降口で窪さんを見つけ声をかけた。

「どうしたの？」と俺は何気なく声をかけてみた。

「あ、内藤君、実は傘を忘れちゃって」

それを聞いて慌てて、鞆の中から返しそびれていた傘を渡す。

「これ、私の・・・」

「実は・・・」

帰り道を二人並んで歩きながら事の経緯を説明して、返し忘れていた事を謝罪した。

「そっか、あの犬内藤君が飼ってるのか」

窪さんは怒っておらず、嬉しそうに答えた。

「うん、ひかりって名前を付けたよ」

「家がマンションじゃなければ、私も飼いたかったんだけどね」

そんな話をしながら通学路を家に向かって歩いていた。

その時、バシャ！と言う音と共に車道を走るトラックが跳ね上げた水しぶきを俺は全身で被って

しまった。

窪さんが「あっ」と声を上げる。

「大丈夫、内藤君？」

「だ、大丈夫」と言ってる傍から大きなクシャミをしてしまった。

「私のマンションすぐそこだから、服乾かして行って」

窪さんの申し出に、断る事を考えたが、二回目のクシャミでお言葉に甘える事にした。

「お邪魔します」

窪さんの家は、道から少し入ったかなり良さげなマンションだった。

「今、タオル持って来るから、玄関で待ってて」

そう言うと、窪さんは奥からタオルを数枚持って現れた。

「まずこれで簡単に拭いて、そしたら入って右がお風呂場だからシャワー浴びて、服は洗濯機の横にある乾燥機に入れといて」

「え、いいよ、これだけで」

俺の辞退の言葉に「風邪ひいたら困るでしょ」と駄目だしされた。

その勢いに負けてシャワーを浴びていると、扉の外から声が聞こえた。

「ここに着替えおいとくから、服が乾くまでこれを着てて」

「ありがとう」

風呂を出て用意された着替えは明らかに女物だが、まあ、辛うじて許容できる範囲の物だった。

着替え終わると、廊下を進み部屋に入った。そこには、普段着に着替えた窪さんの姿があった。

「あの、シャワーありがとう」

「どういたしまして、紅茶で良いかな？」

「はい」そう答えると、俺は奨められるままソファーに腰を下ろす。

ソファーに腰を下ろすとすぐに良い香りのする紅茶が出される。

「ありがとう」

窪さんも斜め前のソファーに腰を下ろすと、紅茶を口に運んだ。

「濡れた服、今乾燥機にかけてるからちょっとだけ待ってね」

窪さんの入れる紅茶とお菓子を口に運びながら、学校の事、拾った犬の話など色々話していた。

気が付けば、窪さんと知り合ってから一番話しているかもしれない。

ふと気が付いたが、既に家に上がってから30分以上経つが家の人を誰も見ていない。

「そういえば、さっきから家の人見ないけど？」

「仕事に行ってるよ」

そう答えると風呂場の方から、乾燥終了のお知らせが聞こえた。

「終わったみたいに、見て来るから待ってて」

そう言うと、窪さんが風呂場の方へ歩き出す。

残された俺は、家に二人だけと言う状況だった事に急に落ち着かなくなった。

「あっ！」そんな邪な考えより重要な事を思い出した。

窪さんが取りに行ったのは、俺の服であり制服も下着も一緒だった事を思い出す。

「窪さん、待って俺の着替えだけど」

慌てて風呂場の方へ、窪さんを追いかける俺が廊下に出ると、そこには知らない女性が立っていた。

「えっと、あの？」

そこへ風呂場から俺の服を持った窪さんが顔を出した。

「どうしたの内藤君？」

しかし、廊下で固まる俺を見つけると、その視線と辿り、自ら背後に立っている人物を見た。

「あさみさん！」

そこには、立っている20代半ばの女性の名前を呼んだ。

あさみさんと呼ばれた女性は、俺と窪さんを交互に見比べると、何か納得したようにうなずいた。

「弘美、まさかあんたが私の留守中に、部屋に男を連れ込むとはねえ」

いやらしい笑みを受けべる。

「違います！」

俺と窪さんは、ほぼ同時にそう反論していた。

それから制服に着替えた俺と窪さんが、あさみさんは紅茶を飲みながら事の経緯を説明していた。

「なんだ、つまらないの」

いやいや、つまらないって、妹が男連れ込んでの方が良かったのかと内心呆れていた。

「まあ、じゃ改めて、私は日吉あさみ、弘美のマネ・・・」

「従妹なんです！」

あさみさんの自己紹介に慌てて、窪さんが声を上げる。すると、あさみさんは窪さんとヒソヒソ話をしている。

話はすぐにまとまったようで、ソファーに戻ると改めて自己紹介された。

あさみさんは、窪さんの従妹で、窪さんの両親が海外赴任中で、東京の高校に通う為、保護者代わりとして同居していると言う話だった。

先程のヒソヒソ話は何だったのか気にはなるが、他人の家の都合に口を挟むのは失礼と思いそれ以上は追究しない事にした。

「あ、いっけない、弘美そろそろ出ないと間に合わないよ！」

「いっけない！」

そう言うと、窪さんは慌てて奥の部屋に入って行った。

「内藤君、悪いけど私達これから出かけなきゃいけないんだ、家まで送って行くよ」

あさみさんにそう促されると、俺も荷物をまとめて変える準備を始めた。

マンションを出ると、あさみさん運転のワゴン車で家まで送ってもらった。

「ありがとうございました」

俺が、運転席のあさみさんに礼を言うと、後部座席から窪さんが顔を出した。

「それじゃ、内藤君、また明日学校でね」

「うんそれじゃ」

そう言うと玄関から犬が飛び出してきた。

「あ、この犬」

「うん、こないだの捨て犬だよ」

俺が抱きかかえて窓越しに頭をなでると、「良かったね、拾ってくれる人が居て」と犬に話しかけた。

「弘美、時間！」あさみさんが声をかけて来た。

「あ、それじゃ、また今度犬見せてね」

そう言うと、窓を閉めて手を振っていた。

それじゃ「これからも弘美仲良くしてね」とあさみさんにウィンクされた。

走り出した二人を乗せた車を、その姿が見えなくなるまで見送っていた。

つづく